

お伽草子『さいき』の妻の自立的な夫婦観

——二人妻説話の一類型としての——

西村 汎子

はじめに

お伽草子が絵草子であることから、文字の読めない「婦女子」にむけて作られたものであるといった昭和初期までの考え方は、今では一掃されて、お伽草子は文字が読め知識を持つ人々にとっても教養と娯楽の対象であったことが明らかに¹なっている。また、お伽草子が先行文学や民間に伝わった話を良く利用していることも知られている。近世になって『御伽文庫』におさめられた『さいき』についても、一九七七年に檜谷昭彦氏が『新撰犬筑波集』の俳諧連歌や、謡曲「藍染川」との関連について述べ、井出幸男氏は「月菴醉醒記」や『和論語』が書き留めた、大内義隆とその妻貞子の話の伝聞との関連を考証している。²それ以前のいくつかの説話との関係も考えられよう。なにしろ、お伽草子の話は、徳田和夫氏が「少なめに見ても、半分ほどの物語は、一個人が机上でつくった物語というよりは、

集団が何代にもわたってつくり上げてきたものといってもよい」といっているほどなのである。⁴

しかし、さまざまの話の影響下に生まれ出た話も、それが絵草子の一つの話として結実する時には、特定の話し手の好みや考え方がここでは夫婦観や人生観によって筋書きが生まれ、一定の感想が語られる。お伽草子の中のよく似た語り出しの二人妻の話もとりの展開と結末を示している。そこには時代の意識と、作り手の独自の意識とが絡まって表れていると思われる。『さいき』の妻の描写については、市古貞次氏が、この時代にありがちな「妬婦談から離脱して、特異な性格の女性を書き上げようと試みた点に、卓抜な着眼が認められる」としながらも「これを表現する方法において、甚だしく拙劣であることを遺憾とする」といった評価を与えている。⁵バーバラ・ルーシュ氏は特に『さいき』に限った指摘ではないが、この時代の女性の出家について、「女性が自らの生きる道を選択す

る余地の極めて乏しかった社会にあつて、出家は、社会が女性に要求する役割を免除される一つの解放の道で「あつたとのとらえ方をしている。⁶⁾以下で私は「さいき」が生み出された歴史的説話的土壌と、『さいき』の妻の、ひいては草子の語り手の夫婦観、および女性の自立と出家との関係について考えてみたい。

一、世間話の伝聞と『さいき』

『さいき』の梗概は、大略次のようである。

豊前の国うだに住む佐伯という人が、一族に本領を取られ、京都に訴訟のために上った。訴訟がはかどらず、祈願に参つた清水で二十ばかりの美しい女房に出会い、相語らうようになった。この女房が禁中に持つていた縁で訴訟のことも片付き、男は豊前へ帰ることになった。この女房は少しの間も男から離れることを悲しんでいたが、男は「お連れしたいとは思うけれども、家来一人しか連れていけないのでそれもかなわない。私のことを忘れずに待つていて下されば、やがて迎えをのほせるので、それまでこれを形見と思つて見て待つていて下さい」といって、びんの毛を少し切つて女房に渡した。

九州へ帰つた男は本領安堵の喜びで、京の女のことはいち忘れ、三年たつても迎えをさせなかつた。京の女房は、今か今かと待つていたが、訪れを待ちかねて、地方へ下る僧に文を託し

た。僧が佐伯の館を訪れた時に佐伯は狩りに出ていて、家の女房がこの文を見た。文には、男が国に下つた後の身の置き所ない寂しさを訴え、最後に

見る度に心尽しのかみなればうさにぞ返すもとの社へ

と記し、佐伯が下る時に形見に渡したびんの毛を巻き添えてあつた。

家の女房はこれを見て、ああ、何と愛らしい、趣のあることだろう。このような優雅な女の人を呼び寄せないでどうしておられようか。これほど不心得な男に、こうだと言つたならばどんなものであろうか。ひとつ、はかりごとを言つて見ようと思つて、自分の妹が自分を頼つて下りたいと言つていたので迎えをやつてほしいと言つと、男はすぐに承知した。女房は仮病を使つて、男に女への文を書かせた。手紙を受け取つて嬉しく思つているので迎えを送るから急いで下るようにとの文である。迎えを京へ上せている間に、佐伯では美しい住まいを建てて待つていた。

喜んで下つてきた京の女を見た本妻は、ああ何と言う美しい女房だろう。楊貴妃や小野小町などと聞き伝えた美人でもこれ以上の人とは思われない。これほど美しい人のことをさえ、夫の佐伯は口に出すこともなかつた、まして私のことなど、長の在京中に一度も思い出すことなどなかつたであろう。これほど不心得な男を頼みに思つた私こそ情けない、と思つて、佐伯を

京の女のところへ会いに行かせたあと、髪を切り、文をのこして家を出て出家してしまった。京の女房はこのことを聞き、情け深いことだ、身分にかかわらず嫉妬するのが常であるのに、こんなにも優しい人をどうして一人で置くことができようか、共に出家しようと思って、すぐに髪を切り捨てて、同じ庵室に閉じこもり行いすましていた。佐伯は、二人の女房に捨てられ、生きがいのない身だと言って、出家して高野山へ上った。

作者は、京の女を見て、夫の不心得に気づいて出家しようとする女房のことを「ただ一筋に思い定めし女房の、心の中こそやさしけれ」とほめている。また結末では、三人が出家したのは、清水のおはからいで、三人とも往生の素懷を遂げ、弥陀、観音、誓至としてあらわれた。「まことにありがたく、尊かりける恵みなり」と言っている。

この説話が何を受けて成立したかについて、前掲の檜谷昭彦氏は、『新撰犬筑波集』の「恋部」に、

筑紫人こそそらごとをいへ

箱崎のまつとはきけど寄せもせず

という付合があることを紹介し、ここでの筑紫人はおそらく九州の人の意味で、筑紫人はうそつきだという諺を下敷きにしてきた俳諧連歌であること、女の側にたつて、捨てて顧みない筑紫の男を恨んだ歌であると言っている。そして、『さいき』は、右の連歌や諺を物語るような内容からなっている、としている。同氏が、類話と

して紹介された謡曲「藍染川」の地上歌でも、「筑紫人、虚言すると聞きつるに、虚言すると聞きつるに、頼みけるこそ、なかなかにはかなかりける心かな」（『謡曲大観』第一巻）とあるから、筑紫人がそらごととして女を捨てて顧みないことはよくあることとして、巷間に伝えられていたことがわかる。

さらに井出幸夫氏が紹介されたものに、天正年間（一五七三—一五九二年）成立と思われる一色直朝著の『月菴醉醒記』の中巻の「巷歌」と題した中に次のような歌謡がある。

九州多々羅のなにかし在京の時作

うきハ在京つまもちなからふたりひとりねをする

此歌をつくしの妻のきゝてふたりひとりねもかなと吟かへたり
となん

また同じく中巻に、次のように載っていた。

たゝらのなにかし在京して、年久しかりし時、むつまじくしける女に別てくへ下りけるとて、びんのかみを切て出したるに、ほどへてそのかみにそへてつかハしける歌

みるたびにこゝろづくしのかみなれば

うさにぞかへすもとのやしろに

此歌をつくしなるつまのみて、になくおもふ心ばへの哀なりとて、こなたへ呼びてかハラぬ心ざしこそあらまほしけれ。さてこそハたけきものゝふの心をもなくさめぬる道にてハあらめやといひて、京なるをんなにかくよみてつかハしける。

身をつみて人のいたさそしられける

恋しかるらむ恋しかるべし

同じく井出氏が紹介されたもので、江戸時代初期の寛文九（一六六九）年頃刊の教訓書である『和論語』⁹には、「貞子は九州大内左京大夫義隆の妻なり。」とあり、義隆が在京中、国に義隆が思いをかけた女房がいたが、貞子からいろいろの贈り物と共に「身をつみて」の歌を贈ったこと、女房が貞子の恩義に感じて出家しようとしたのを、貞子がそれでは身のとがになると止めて直接召し使った、貞子は万里小路内大臣秀房の女で、賢女で歌人であると記されていた。

周知のように、大内義隆は周防の山口を本拠とし、中国・北九州一帯を支配した戦国大名であり、井出氏が調べられたように『公卿補任』に「大内多々良義隆」と出ており、「多々良」は大内義隆の賜姓である。天文五（一五三六）年五月に太宰大式に任ぜられ、天文二〇（一五五二）年に死亡している。¹⁰井出氏は、『月菴醉醒記』の「た、らのなにがし」は大内義隆であり、その記述は死後いくらか経たない天正年間（一五七三～一五九二）に書かれたことになると立証している。また井出氏は、「みるたびに」の歌とその前後の話は、延慶本『平家物語』の平清経の話と同じであり、世阿弥作の能『清経』にも見られるから、『酔醒記』の「た、らのなにがし」の話は、多分に借り物による潤色が含まれていることになるが、「大切なこととは、義隆が実作者であるという決定的な証拠ではなく、当時の人々

がそのように信じて『巷歌』として歌っていたという事実の方であろう。」と言っている。

大内義隆は天文二〇（一五五二）年九月に家老の陶隆房に叛かれて敗れて自害した。同じく井出氏が紹介している、義隆の側近によって記された『大内義隆記』¹¹には、義隆の本妻は万里小路殿の女であったが、「本女中ニテヲワシマセシ万里小路殿息女ニツカハレ玉フ上臈ニテヲサイノ方ト申セシガ。義隆ノイツノ間ニオモハレ人トナリ玉ヒ。御懐妊ノ事ドモハ餘所ニシラレズ。御曹子誕生アレバ本女中次第々々ニ遠クノガレ。天文十八年ノ春ノ比都へ送り玉フ也。」とあり、「おさいの方」を北の方と呼んでいる。このほかにも、「広橋殿の息女」で「喝食」上りの「東の御殿」と呼ばれていた人がいた。これで見ると、夫の思い人の侍女に優しくしたとうわさされた本妻は、子が生まれなまに夫との仲が疎遠になり、正妻の座を侍女に譲らねばならなくなったのである。本妻が京へ帰された天文一八年は義隆の死の二年前であった。同記には「おさいの方」と「東の御殿」は夫が敗死する時、寺へ逃げ込んで出家した、とある。

『義隆記』は義隆が死んでから僅か三か月後の天文二〇年十一月に、義隆の死を惜しむ側近によって書かれたもので、真実性は高い。『尊卑分脈』を見ると、天文二〇年前内大臣正二位で死んだ万里小路秀房の女子は、父が高位高官であったにもかかわらず、「大内義隆妾」となっており、¹²「左大史小槻伊治女」で後に内大臣従一位広橋兼秀の養女になった兼子が「多々良義隆御室」と記されてお

り、嫡子の義尊の母と記されている。万里小路の女子は、都へ帰されたために妾と記されたのであろう。別に広橋兼秀の実子の「寿玉」という人が「多々良義隆卿為子」と記され、この人が「東の御殿」と呼ばれた人ではないかと思われる。こうしてみると、「筑紫人こそそらごとをいへ」の諺や歌と、『平家物語』などの「見るたびに心づくしの」の歌の話を人々がよく知っていたところへ、義隆の艶聞と妻たちの成り行きについての伝聞が世間に広まり、妻貞子が歌がうまく側室に寛大であったうわさ話が加わって、『酔醒記』の話が生まれ、その話に更に後日談がつけ加えられてお伽草子の『さいき』が生まれたのであろう。その時、お伽草子の作者は、義隆の本妻が夫と疎遠になって京に帰された事を知っており、読者の中にもそのことを知っているものがあることが、予想されたにもかかわらず、本妻の方から夫に見切りをつけてきっぱりと別れた結末にした。実話がある程度踏まえつつも、まったく別種のフィクションによる筋書きを創出した。このことは実に興味深い。

二、二人妻物語における『さいき』の特異性

(一) 嫉妬しない女、優しさと風流心で夫を感動させる女の話
二人妻物語における本妻のタイプには、大きく分けて二つの流れがある。一つは、夫が新しい女のもとへ通ったり、若い女を家へ連れてきたりしても嫉妬を表に見せず、優しさや寂しさを表すことで

夫の心を取り戻す妻たちである。

1. 『伊勢物語』二二三段「むかし、田舎わたらひしける人の子ども、井のもとに出でてあそびけるを」⁽¹⁵⁾
2. 『大和物語』百四十九「昔大和の国葛城の都に住む男女ありけり」⁽¹⁶⁾

3. 『今昔物語』卷三十「住下野国、去妻後返棲語第十」⁽¹⁷⁾

4. 同「品不賤人、去妻後返棲語第十一」⁽¹⁸⁾

5. 同「住丹波国者妻、讀和歌語第十二」⁽¹⁹⁾

6. 『沙石集』第一(二)「無嫉妬ノ心ノ人ノ事」第一話⁽²⁰⁾

7. 同 第三話⁽²¹⁾

1. は、「筒井つもの」歌を詠み交わし、長じて夫婦になった二人が女の親が死んで貧しくなり、このまましがたない暮らしをしていても、男が別の女のところへ通うようになった。けれども、本の妻がそれを不愉快に思っている様子もないので、男が物陰で、女に別の男でもいるかとうかがっていると、「風吹けば沖つ白浪たつた山夜半にや君がひとりこゆらん」と歌ったので、限りなくいとしいと思つて新しい女のところへ行くのをやめた、という、よく知られた話である。

2. の話は、1とほぼ同じである。ただこの方には、本の妻は男が歩いても少しも妬げに見えなかったが、「心ちにはかぎりなく妬く心憂しとおもふを忍ぶになむありける」の指摘がある。

3. は、夫婦が長年ともに住んでいたが、どうしたことか夫はその

妻を去って別の妻をもうけ、本の妻のところにあつたものを塵ばかりも残さず、今の妻のところへ運び込んだ。しかし、本の妻が「ケフヨリハウキ世ノナカライイカデワタラム」と歌つてよこしたのを聞いて、哀れに思つて前のように本の妻と住むようになった。作者は、風流を解し歌を詠むものはこのようにいい事がある、といっている。

4. の身分の高い公達の受領のばあいは、長年住んだ妻を去つて、当世風の女のところに住んでいた。この妻も男が届けたはまぐりを大切に寂しい気持ちを歌に詠んだので、夫は本の妻の優しさに感じて戻り住んだ、という。

5. の丹波の国の男は、二人の妻をもつて家を並べて住んでいた。男はその国の本の妻よりも京から迎えた今の妻をよけいに思っていた。しかし、鹿の鳴くのを聞いて、鹿の肉を食べる事だけ思う今の妻に比べ、自分の寂しい気持ちを連想して和歌を読んだ本の妻を哀れに思つて、今の妻を京へ送り、本の妻と住むことにした、という話。

6. は、ある殿上人が田舎下りから遊女をつれて上洛し、北の方に邸から出るように言った。北の方は少しも恨む様子もなく、こまごまと女を迎える準備をし、見苦しいものを片づけて自分は邸を出た。遊女は恐れ驚いて、北の方をもとのところに住まわせて、自分は別のところにて時々召してほしいと願つた。殿も北の方の情けに感じて北の方を呼び戻した。二人の女性は隔てなく暮ら

した、と言う。本妻が後の女を手厚く扱っている点で、この話と『さいき』の類似性は高い。

7. は本の妻と今の妻を相住みさせていたが、5. と同じく本の妻が鹿に寄せて、寂しい思いを歌つたので、哀れに思つて今の妻を送り、本の妻の許に帰つた話である。

これらの話は、女の側が一夫を守るように求められていくのに対し、男の側の複数の女性関係を女性が容認せざるを得なくなつて行く状況の中で劣位の妻の行動である。これらの妻はどのように感じていたのであろうか。3. 4. 5. 7. の話では妻の寂しさだけが示されて夫の心を動かし、1. では妻が却つて別の妻のところへ行く夫の道中を気づかっている。2. の『大和物語』の話だけが本妻の気持ちを、「心ちにはかぎりなく妬く心憂しとおもふを忍ぶになむありける」と、物語の語り手によって説明されている。6. の場合は、北の方の行動だけでその気持ちは少しも説明されていない。ただ、これらの妻の気持ちや行動は、7. の話のあとに「只ネタミクネリテ、怨ミラムスバズシテまめやか 二色深クハ、自志モアルベキニヤ」とあるように、おんなはしつこく妬まぬのがよい、そうすれば自然によいことがある、といった語り手の、ひいては世間の男性優位の倫理の枠内でおこっていると思われる。

平安時代までは、嫡妻はいても複数の女性配偶者がいずれも妻と呼ばれていた。それだけに夫の心も移ろいやすい代わり、妻の貞操への要求も後世ほど過酷ではなかった。とくに平安時代の初期まで

は、そうした対偶婚時代の名残とも言える状況があったと思われる。平安時代初期の作品である1.の『伊勢物語』の話や2.の『大和物語』の話の、嫉妬しない妻に別の男がいることを予想して夫が物陰から覗き、男はいなくて自分を思っていた妻に心を打たれるといった話も、妻の貞操に対する追求がまだそれほど厳しくなかった中で、起こっている話である。しかし、貞操への要求がさらに厳しくなる鎌倉期の6.以下の『沙石集』の話になると、本の妻は嫉妬心を無理に押し隠していることがあらわに示され、作者もそうしたモラルを強制している。『さいき』の話の前半は以上の類型に属し、夫が連れてきた女性を嫉妬せずに、手厚く遇する点で6.の『沙石集』の話に似通っている。ただし、『さいき』では、妻の新しい女への印象が積極的に開陳され、妻が女のすばらしさにに感嘆しているところが異色である。

(二) はげしく嫉妬する女、後妻を討つ話

二人妻物語に登場する本妻のもう一つのタイプは、夫の新しい女をはげしく妬んで、その女性を死に追いやったり、蛇体となって狂う「妬婦」型である。『源氏物語』にも「二人」妻ではないが、光源氏が自分よりも夕顔を寵愛するのを怨んで、夕顔をのろい殺す六条御息所のような女性が登場している。『さいき』の前後に作られたこの類型の説話で、『さいき』と似通った筋書きの前半部を持つものを挙げると次のようである。

1. お伽草子の『あるそめ川』
 2. 同右 『高野物語』第四話
 3. 同右 『いそざき』
 4. 『七人比久尼』下 「みいけ殿の事」
1. では、太宰府安楽寺の神主のなかつかさよりずみだが、訴訟のため在京して梅壺の侍従と情を交わしたが、別れて国へ帰った。女は父を恋しがる一〇歳の男子を連れて九州へ下るが、国の女房が夫になり代わって薄情な手紙を渡し、失望の余り女は身を投げる。気がついた夫が悲しんで女房を弔い、父子の対面をする。
 2. 佐々木という男の本妻が、嫉妬の余り夫の在京中に今の妻に近づき、中間に僧の姿をさせて今の妻を殺させ墓原に埋めさせる。夫は恨みから僧と見れば片端から殺すが、墓原を通りかかった僧から、ことの次第を知り、今の妻の遺体を掘り起こして供養し、自分も出家する。
 3. の話では、日光山の麓、磯崎の武士が所領のことで鎌倉へ行き、一七歳の美しい女房を連れ帰る。本の女房は妬んで、旅の猿樂から鬼の面を借りて若い女房を脅し、叩いて殺してしまう。そのあと人の姿に戻れず人に食って暮らしていたが、息子の日光山の稚児学生の教えにより、無想・無意の境地になって元の姿に戻る。作者は「人をあわれみ、そねむことなかれ、女人のためにこのものがたりかきおくなり」と言っている。
 4. は、みいけ殿の筑紫の妻が上洛したまま便りの無い夫を訪ねて

一子藤若と共に上洛する。夫の新しい女房に謀られて夫に見放されたと思つた女房は身を投げ、通りかかった夫は息子に名跡を継がせ、悲しみの余り出家する話で、「あるそめ川」と酷似している。

現実では、前妻が後妻をこらしめる慣習が、「うわなり(後妻)打ち」といつてすでに平安時代からあつた。藤原行成の『権記』および藤原道長の『御堂関白記』に寛弘七(一〇一〇)年と九年の二度にわたり、藤原教通の乳母で祭主中原輔親の妻蔵命婦が、後妻のいる鴨院西対へ、教通の隨身と下女三〇人を送つて「内財雜物」を破損させたことが出ている。鎌倉時代には北条政子が源頼朝が寵愛した亀の前のいる屋敷を御家人を派遣して破却し、亀の前が命からがら逃げ出した事件が『吾妻鏡』に記されている。²³ これらの行為は堂々たる自己主張で、陰惨さが見られない。ところが、中世も文安元(一四四四)年ともなると、『九条家文書』に出ている例であるが、在地の武士と思われるものの妻が、中間らをひきつれて夫が寵愛していた百姓の下女を召し捕つて殺している。²⁴ 妾の存在が当然視され、一人の正妻と妾との差別が明確になっていく中で、正妻の新しい女に対する嫉妬が主人権の発動の形で悲劇を生む例が現実起きていく。そうした一方で、男性優位の論理から、妾の存在を認めずに嫉妬する女性を、極端に醜く描き出し、道徳的に戒める話が増えてくる。二人妻説話の第二の類型が時代を下るにつれて増加してくるのはそのような背景の下でだと思われる。

三、『さいき』の妻の夫婦観

『さいき』の妻の意識や行動は、話の前半までは二人妻説話の(一)の類型を受け継いでいるところがある。中世後期にかけてより厳しく求められるようになる、妻は夫にほかの女ができて、嫉妬すべきでないとの倫理を体現している。妻の感性の中では、夫の裏切りを不快にさえ感じていない。それどころか京の女から夫に宛てた手紙を見るや、「あらうつくしや、おもしろや」と、女の文字のりっぱさや教養の高さを賛嘆する。そして、これほどの女を見捨てて顧みない夫の「不得心」に、自己の利害を超越して腹を立てる。自分のライバルとしてでなく、慕い続けて男から誓いを破られた同性への共感から夫をだまして京の女を呼び寄せる。それも女のために美しい「御所」を建ててである。自分の妹が来ると言つたのであるから、妻の手で何くれとなく準備したのであろう。このあたり一帯の描写はてきぱきと妻主導で進められていく。そんな魅力的な女を夫に会わせた結果がどうなるかは、ここでは度外視されている。忘れ去られた女を見捨てるべきで無いというヒューマニスティックな発意の方が先行している。

京の女房を迎え入れじかに京の女に接した妻の賛嘆の思は手紙を見た時以上である。あまりの美しさを見た感動で、立っている場所もわからないほどであると言う。ここで読み手の方では、この話の成り行きは果たしてどうなるのであろう。妻が京の女に夫の心を

奪われて、不幸になるのではないか、あるいは夫が京の女の美しさと、国の妻の優しさ・才覚とを二つながら物にし、二人の女は第一の類型の6の『沙石集』の女たちのように、「隔てなく」共存して暮らすのだろうかと思う。ところが妻は次のように思ったという。「かほどうつくしきひと」のことを言い出すことの無かった夫は、「ましてわらはがこととは、年月長々の在京に、一度も思ひ出すまじ」。夫の愛が、こんなに美しい京の女に対してその場限りのものであったとすれば、当然自分に対してもっとその場だけのものであったに違いない。夫の複数の女性関係に疑いを抱かず、夫の忘れていた京の女に同情して呼び寄せるといふ、身勝手な夫に好都合な意識の持主であった彼女は、その立場に徹することによって真実に近づく転回をした。夫の京の女に対する愛の不在を照射すると同時に、夫と自分との関係をも照射したのである。そうして、翻然として夫の自分への愛の不在に気づく。しかしここでも妻は騒がない。夫と自分の気持ちの間に横たわる深い溝。それは容易に越えられるものではない。妻はそれよりも、「かほど不得心なる男を頼みしわれこそあさましけれ」と、夫と共に自分自身の誤まりにも予先を向ける。そうして出家を一筋に決意する。

本妻は夫の在京中夫の上を思っていたのであろうし、今も思っている。だがそれは一方的なものにすぎなかった、そう気づくと妻は夫を京の女のいる新居へ導き、自分は髪を切り、書き置きを置いて家を出た。相手のことを心に思い出さないようなものは愛ではない、

という確信。そして結婚生活が夫婦の相互的な愛情の上にこそ成り立つものである、と言う近代的とも言うべき夫婦愛についての考え方がそこにはある。相当な所領を持つ武士の妻として安穩な生活を送ることが約束されていたに違いないこの妻は、それをむなしものとしてやすやすと捨てたのである。作者はこのような女の出家の決意を「心の中こそやさしけれ」、すなわち殊勝であるとほめたたえている。京の女はこれを聞いて、高きも卑しきも嫉妬するのが普通なのに、こんな情け深い人をどうして一人にしておけようかと出家し、同じ庵室で修業した。惨めなのは夫のさいきである。「二人の女房に捨てられて、あるにかいなき身のほど」と思って、これまた出家して高野山へ上った。

檜谷昭彦氏はさいき(佐伯)は「はなはだ気の毒な役回りを演じたことになる」とし、「国もとへ戻って本妻を愛し、京の女を忘れた三年間は、男として浮気もしないまっとうな生活だったはずである」と言っている²⁵。しかし、『さいき』の妻が問題にしたのは形ではない。たとえその時一人と向かい合っていたとしても、その相手に向けられた気持ち、離れている時には心に浮かびもしないようなものであれば、それは愛のない便宜的な同居にすぎないということである。

おわりに

『さいき』の妻は、夫の女の存在に気がついて嫉妬しなかった話の前半においては、一見自由に人間的に行動しているように見えるが、やはり、無意識のうちに、多妻の存在を甘んじて受け止めるようとする、封建的家族道徳の呪縛の中に身を置いていたと言えよう。だが後半になると、『さいき』の妻は飛躍的な成長を遂げる。彼女は一夫多妻妾を許す奴隷的封建的夫婦観の底にひそむ愛の不在という非人間性を見抜き、富裕な生活と訣別するという大きな犠牲を払って、無意味な結婚生活に基ずいていた今までの自身の生活を断ち切った、という意味で、封建道徳を乗り越え、自我の自由を獲得して自立したのであった。世間の認める出家の道がそれを許した。

『さいき』は、これまでの二人妻説話を初めとするいくつもの説話や、和歌、諺を引き継ぎ、大内義隆と万里小路貞子の実話とも絡めながら、誕生した説話である。義隆の記憶がまだ消えやらないころ、義隆が死んだ天文二〇（一五五二）年よりは、それほど多く下らない頃に作られた作品であろう。多くのものを受け継ぎながらも、新たなフィクションによって、とくにその結末を大きく変形させた。それによって、これまでの二人妻説話のどの話にも見られなかった卓越した夫婦観、ひいては人生観を描いた点で、極めて優れた内容を持つ作品であると言えると思う。市古氏が着眼の卓抜さを認めつつも指摘された表現の拙劣さについても、次のように考える。お伽

草子の場合、心理描写が簡潔で、ときとしてものたりないのは特徴的である。ただ『さいき』では、妻の心理描写は、その特異性のために一読して理解し難いように見えるが、順を追ってゆくとそのときどきの気持がよく説明されているのに気づく。特に結末の夫との訣別、出家を決意するに至る妻の心理は、鋭い感受性をこめて、簡潔かつ十分に表出されていると思う。女性の論理が見事に展開されているこの作品は、とりわけその結末は女性の手に成るものである。

バーバラ・ルーシュ氏が指摘される中世の女性の出家については、私も強い関心を持っており、本誌の前号においても、「中世小説に見る女性観——御伽草子『あきみち』の場合」の中で、あきみちの妻の出家の意味について考察した。²⁶源氏物語の宇治の大君と浮舟の出家についても、「源氏物語における女たちの自我」なる論文で若干の考察を加えている。²⁷この問題についてはまた、稿を改めて考察するつもりである。

註

- (1) 徳田和夫『御伽草子の研究』(三弥井書店一九八八年)、同『お伽草子』(岩波書店一九九三年)など。お伽草子が成人公家の読み物で彼らが日常茶飯に接していたことが、一四一七世紀の公家たちの日記からわかることが記されている。
- (2) 「御伽草子の転生」(国文学解釈と教材の研究)一三卷一六号一九七七年二月)
- (3) 「室町小歌」の一基盤——『月菴醉醒記』所収の「巷歌」を中心

- にして」(梁塵)三号中世歌謡研究会 一九八五年二月)
- (4) 前掲註(1)『御伽草子』
- (5) 『中世小説の研究』第二章僧侶小説 一五四頁(東京大学出版会一九五五年)
- (6) 『もう一つの中世像』(思文閣出版一九九二年)
- (7) 檜谷氏は、『さいき』が、『伊勢物語』二十三段・一二三段、『大和物語』一四九段、『堤中納言物語』の「はいずみ」のほか、『今昔物語』卷三〇の「住下野国、去妻後返棲語第十」「品不賤人、去妻返棲語第十一」「住丹波国者妻、読和歌語第十二、「沙石集」第七の一「無嫉妬ノ心人ノ事」などの、「二人妻説話」の一変型である事を述べている。しかし、氏が先行説話ではないかと推定される『太平記』卷二二の「佐々木信胤成宮方事」は、「二人妻のうち京の女が、田舎生まれの本妻と共に任地の伊勢の国へ連れていこうとする夫を嫌って、「八十許ナル古尼」を身代わりに立てる話で、先行説話とするには内容がかなりかけはなれている。
- (8) 『古典文庫』四一五冊(一九五一年四月)、解説は鈴木裳三。
- (9) 勝部貞長著『和論語の研究』(至文堂一九七〇年)の解説による。著者は伊勢貞丈の『貞丈雑記』に沢田喜太郎源内とあった。翻刻も同書に載っている。神代より近世初頭までの諸神、天皇をはじめ、著名人の人生、社会生活に対する名言のたぐいを抜粋して編集したもの。巻五・六武家部、巻七貴女部
- (10) 『公卿補任』第三篇 四〇六、四二九頁。長門の国に於て「僕」に叛かれて自害したとある。
- (11) 『群書類従』第二十一 合戦部二、四二二頁
- (12) 国史大系『尊卑分脈』第二篇八七頁
- (13)・(14) 同右書 二六二頁
- (15) 『竹取物語伊勢物語大和物語』(日本古典文学大系)岩波書店一九五七年 一一六―二七頁
- (16) 同右書 三二〇―三二二頁
- (17) 『今昔物語』(日本古典文学大系)岩波書店一九六三年)一三七―一三八頁
- (18) 同右書 二三八―二四〇頁
- (19) 同右書二四〇―二四一頁
- (20) 『沙石集』(日本古典文学大系)岩波書店一九六六年)二九三―二九四頁
- (21) 同右書 二九五頁
- (22) 『権記』寛弘七年二月二十八日、および『御堂関白記』寛弘九年二月二十二日の項
- (23) 『吾妻鏡』第二、寿永元(一八八二年)十一月十日の条
- (24) 『九条家文書』文安三元(一四四四年)十二月、上原郷百姓等目安。峰岸純夫氏の紹介による。
- (25) 前掲論文 五七頁
- (26) 『白梅学園短期大学紀要』二九号(一九九三年三月)
- (27) 『歴史評論』四九一号(歴史科学協議会一九九一年三月)

〔追記〕

本稿脱稿後に、バーバラ・ルーシュ氏の「熊楠とお伽草子、そしてジェンダー」(『国文学解釈と教材の研究』お伽草子文学と絵と物語と三九巻一号一九九四年一月)に接した。氏はそこで、ジェンダーの文脈で長い間関心を持ってきたお伽草子の作品として『さいき』『あきみち』『花鳥風月』の三つを挙げ、「中世物語の女たちは、しばしば江戸時代の物語の女たちよりよほど現実の女たちに近くみえます」と言っている。同感である。氏はまた、これら三作品に現れる男女の役割に関する研究をかつて見たことがない、と言っている。氏に、前掲の拙稿と共にこのささやかな研究を紹介したいと思う。

にしむら ひろこ (日本中世史・女性史)